
バイオハザード エターナルナイトメア

ジャズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バイオハザード エターナルナイトメア

【Nコード】

N4967H

【作者名】

ジャズ

【あらすじ】

普通の高校一年生、三沢浩一は故郷のエーテルタウンにて、バイオハザードに遭遇する。友人二人と共に、彼は故郷からの脱出を決意した……。この小説は、カプコンのバイオハザードを元に作られています。カプコンとは一切関係ありません。

第一話「暴動」

第一話「暴動」

何がどうなってる？誰か教えてくれ・・・。

どうして・・・どうして俺は死にかけているんだ？

どうして俺はゾンビみたいな奴に食われそうになってるんだ？

誰か教えてくれ・・・。

数時間前・・・。

俺の名前は三沢浩一、普通の高校1年。ただ、通っている学校が外国にあるって意外は

特に変わった所は無い。俺はとある国にある町、エーテルタウンに住んでいる。

え？何でかって？簡単、ここで生まれ育ったからだ。俺の両親はハーフ、親父が外人でおふくろが日本人だ。ただ、親父とおふくろはとっくの昔に離婚してる。俺は赤ん坊の時におふくろに引き取られた。だから、俺の名前も日系の名前だ。

俺は学校に続く道を歩いている。

「おっす！浩一！」後ろから話しかけられる。

「ああ、松山か」こいつは松山勇、俺の親友で、留学生。こいつとは今年知り合ったばかりだ。

「おはようさん」俺はのんびりと挨拶をする。松山が話始める。

「そういやさ、今朝やけにパトカーが通ってたよな？」

「ああ、そうだな。何かあったのか？」今朝は早朝からパトカーのサイレンが響き渡っていた。それも何度も。

「噂によると、暴動らしいぜ。朝からご苦労なこったな」

「暴動か・・・」なぜだろう、嫌な予感がする。

そんなとき、また後ろから話しかけられる。

「ういっす」振り返って見ると、友人であるカイルが立っていた。

本名はカイル・リーバー。同じく高校1年の同級生だ。こいつとも仲良くやっている。

カイルは日本語が非常に上手だ。

「おっす、カイル！ところで、暴動のこと知ってるか？」

「暴動？いや、知らないな。こんな朝っぱらからあったのか？」

「ああ、それも結構大規模のやつさ」松山がそう応える。

「大規模か……。学校まで来なきゃいいけど」俺は心配になってそう口に出した。

まさかこの事が本当になるとは、誰も予想できなかった……。

第一話「暴動」(後書き)

恥ずかしながらこんなバイオ小説を書いてしまいました・・・。
つ
まらないかも知れませんが、どうぞお楽しみください。

第二話「歩く死者」

暴動の会話をしつつ、校門をくぐるろうとすると、先生に呼び止められた。

「おい、お前ら」

「なんすか？」松山が気の抜けた返事をする。

「今日は暴動が起こってな……。学校は臨時休校だ」

「マジで！やっほーい！遊び放題だぜ！」松山がそう、調子のいい声を上げる。

「全く……。自宅待機か、学校にいるかのどっちかだぞ」先生が釘を刺す。

「げっ……。！マジですか……。」大方、ゲーセンにでも行くつもりだったのだろう。

カイルは肩をすくめて言う。

「やれやれ、来た意味がないな……。どうする、浩一？」

「俺は図書室に行くけど？お前らはどうする？」家に帰っても、誰も居ない。

おふくろはもう死んでしまった、家には俺一人だ。

「俺もそうするかな。勇、お前はどうする？」カイルが松山に聞く。

「しょうがねえ、図書室でコミックでも読むか……。」学校の図書室には、漫画も置いてある。

俺達三人はとりあえず図書室に行くことにした……。

図書室

「あー……。暇だ」松山が机に顎を乗せながら言う。

「家に帰ってもやることは無いしよお……」

「だったら勉強でもしたらどうだ？」カイルが松山に進める。

「勘弁してくれ……」松山がそう言うと同時に、外で悲鳴が上が

った・・・。

「な、なんだ！」俺は咄嗟に周囲を見渡す。図書室は騒然となっている。

「まさか、暴徒か・・・？」カイルが不吉な事を口にする。

「見に行ってみようぜ！」松山が外に出て行く。

「あっ！おい、待てよ！」俺とカイルが追いかける。

廊下

廊下は酷い有様だった・・・。

一面血の海だ。生徒の死体も転がっている。

「な、なにがあったんだよ・・・」松山が口に手を当てながら言う。俺も、今にも吐きそうだ・・・。

周りに生徒の姿は無い。皆、どこかに走って行った。

「これは酷い・・・。食いちぎられてるぞ」カイルが遠くから死体を観察している。

「まさか、人食い集団？」松山が言う。

「よしてくれ・・・」俺はそう言うと、現場を後にしようとする。すると・・・。

生徒の死体が起き上がった。

「えっ・・・？」松山はそれをぼけっと見ている。死体が歩いた。

「う、うわああああ！！」松山が悲鳴を上げて逃げる。

「クソッ！なんだコイツ！」カイルも逃げてくる。

「二人とも走れっ！」俺は二人と共に逃げる。

死体が歩いた・・・？ホラー映画じゃあるまいし。

でも、俺達は死体に追いかけていた。幸い死体のスピードは遅い。

なんとか図書室まで逃げる。ドアをロックし、三人でドアの前にバリケードを作る。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・！」何が起こってるんだ？

「大丈夫か・・・？」先生の一人が声を掛けてくる。

「し、死体が歩いた・・・」俺はそう呟く。

「落ち着け！大丈夫か！？」先生が俺の肩をゆする。

「は、はい・・・。大丈夫です」そう応えながら、図書室を見渡す。何人もの負傷した生徒が居た。

「カイル、松山、大丈夫か？」俺が二人に聞く。

「な、なんとかな・・・」松山が意気消沈した声で答える。

「ああ、無事だ・・・」カイルも意気消沈している。

当たり前だろう、目の前で死体が歩いたのだから・・・。

「お前ら、怪我はないみたいだな」先生はそう言うと、ペットボトルの水を渡してくれた。

「ありがとうございます・・・」俺はそれを一口だけ飲む。

「先生はこれから、取り残された生徒が居ないか調べてくる。先生が帰ってくるまで、じっとしてろよ」先生はそう言って、図書室から出て行くとする。

まずい、バリケードを崩したらあいつ等がなだれ込んで来る。

「先生！駄目です、いまバリケードを崩したら奴らが入ってきます

！」俺は先生にそう呼びかける。

「じゃあ、どうすればいいんだ？」先生が聞いてくる。

「そ、それは・・・」俺にも思いつかない。

どうすればいいんだ・・・？

第三話「武器」

俺が悩んでいると、誰かが悲鳴を上げた。

「誰か来てくれえ！」そっちを見ると、生徒がまた一人、奴らと同じようになっていた。

体は腐っていて、うめき声を上げながら人に襲い掛かっている。

「うぎゃああ！」そして、生徒の一人の首下を噛んだ。奴はそのまま、生徒の喉笛を

噛み千切った。女子が悲鳴を上げる。先生が生徒を落ち着かせようとする。

が、皆はパニック状態だ。誰かがバリケードを取り払っている。

「や、止めろっ！」カイルが叫ぶが、バリケードは取り払われてしまふ。

同時に奴らの大群がなだれ込んできた。

「松山！カイル！先生！逃げよう！」俺は、図書室の反対側にある裏口へ行く。

裏口はB校舎に繋がっている。

「急げっ！」三人が走ってくる。奴らが追ってくる。

裏口を出て、とにかく全力疾走する。右側に階段が見えてくる。

「上るぞっ！」先生が先に階段を上っていく、そして……。

「うわあああ！」奴と鉢合わせした。

「先生っ！」先生は奴に肩を掴まれている。そして、首から食われ始めた……。

「浩一！止まってないで走れっ！」カイルが急かす。

「でも先生がっ！」こうしてる間にも、先生は食われている。

「諦めろっ！それより逃げるんだっ！」カイルが俺の手を引く。

「クソッ！クソッ！クソオオオ！」俺は走った。泣きながら走った……。

空き教室

「クソッ！なんだってんだよ！」松山が悪態を突いている。

俺達はとりあえず、空いていた教室に他の生徒や先生と避難していた。

「分かったら苦労はない・・・」カイルがそう言う。

「あれが暴徒だっていうなら、警察はどうなったんだ？」他の生徒が話しかけてくる。

「お前は？」俺がそう質問する。

「俺はマーク、マーク・ジャクソン」マークはそう言って、俺と握手する。

「よろしくな、マーク」俺はとりあえず挨拶する。

「怪我人は居ないか？」先生が聞いてくる。よく見ると、見知った先生だ。

「ジェイムズ先生！無事だったんですね！」ジェイムズ先生は社会科の先生だ。

「まあな。それより、怪我人は？」

「今のところは大丈夫です」全員無事だ。誰も噛まれてない。

「にしても・・・あれじゃまるでゾンビだな」ジェイムズ先生がそう言う。

「とりあえず、武器になるものが欲しいな・・・」マークがそう言う。

「銃でもあればな・・・」俺はそう言って、窓の外を見る。見事に曇ってる。

その空を、一機のヘリが飛んでくる。

「ん？ヘリだ」松山も一緒になって見る。

ヘリは学校の真上に来ると、屋上に何かを投下した。

「何だあれ・・・？」よく見ると箱のようなものだ。

校庭にも投下している。

「ちよっと見てくる」ジェイムズ先生がそう言って出て行こうとす

る。

「俺も行きますっ……！」松山が手を上げた。

「危険だ、待ってろ」先生はそう言って行こうとする。

「一人で行く方が危険ですよ！」松山はさらにそう言う。

「俺も行きます」カイルも立候補する。

「お前らな、どういう状況か分かってるのか？」先生は呆れながら言う。

「分かってますよ。もしかしたら、あの箱に武器が入っているかも知れませんが」カイルが冷静に言う。

「そうです、一人じゃ運びきれないかもしれないじゃないっすか！」松山はそうまくし立てると、校庭に向かって歩いて行った。

「俺も行きます！」俺も立ち上がる。二人が行くんだ、黙って見てる訳にはいかない。

「浩一、お前もか……」先生は呆れながらも、松山を追いかけて校庭に出る。

校庭

「こ、これは……」箱の中にあったのは、ありったけの銃と弾薬と道具だった……。

第四話「決意」

「す、すげえ…」松山が思わず口に出す。

カイルはすでに銃を手に取っている。ベレッタM92Fだ。

「弾は装填されてないな…」カイルの持っているM92はスライドが下がりきっている、つまり装填されていないという事だ。

「先生、どうしますか？」カイルが比較的落ち着いた声で先生に話しかける。

「と、とりあえず何挺か持って行こう」先生はそう言って、箱の中にあったM4A1カービンを手にした。

「自動小銃はやめた方がいいと思う」カイルが言う。

「え？何でだよ、火力上がるじゃん」松山が反対する。

「もしパニックになって引き金を引いてみる、味方を撃ちかねないぞ」カイルはどうやらそこまで考えていたらしい。

「持っていくとしたら、ショットガンかハンドガンだ。グレネードランチャーなんて論外、

狭い教室や学校で使うべきじゃない」

「確かに、リーバーの言うとおりだな。とりあえずはハンドガンとショットガンで武装しよう」先生はそう言って、M4を箱に戻し、代わりに箱の中からベネリM3ショットを手にした。

「浩一、お前も何か持っておけ」

「あ、ああ。どれがするか…」実物を持つのは初めてだ。一応、家には趣味で買ったエアガンがあるが、比喩物にならない。俺は箱の中にあったグロック17を手にとった。

グロックはプラスチック製の自動拳銃で、重量も軽い。箱の中からグロック用のマガジンを取り出す。弾は入っている…。俺はそれをグロックに入れ、スライドを引いて装填する。

カイルは持っていたM92にマガジンを入れ、装填した。

「俺は…これだな！」松山は箱の中からコルトガバメントを取り出

した。

「おいおい装填弾数7発だぞ、それ」俺がそう告げる。いくら口径が大きいと言っても、弾切れになつては意味が無い。

「駄目か…、じゃあこれは？」ガバメントを諦めた松山は今度はUSPハンドガンを手にしていた。

「ああ、それがいいな。何口径だ？」

「45ACPだ、12発だっけ？」コイツはなんだかんだ言つて銃に詳しい。まあ、俺もだが…。

「決まりだな…」松山は箱の中からホルスター付きベルトを取り出し、ズボンに付けている。

先生はM3に慣れない手つきでショットシェルを詰めている。

「こ、こうか？」7発入れ終わり、俺に聞いてくる

「そうですね、OKです」キチンと装填されていた。俺も松山と同じく、ホルスター付きベルトをズボンに付ける。ついになぜか入っていた背囊の中にマガジンと弾をありったけ入れる。

他の三人も見習つて背囊に弾を入れ始める。俺は別の背囊に適当な銃と弾をありったけ入れる。他の生徒用だ。

「よし、準備完了だな」先生はそう言い、教室に戻る。俺達も後に続く。

空き教室

教室に戻った俺達は、銃が扱えそうな生徒に銃を配っていた。箱の中にはまだ大量の銃器があったが、とりあえずは我慢する。

「すごいな…」マークは驚いたようにそう言いつつ、背囊から拳銃を取り出した。

マークが取り出したのは、ワルサーPPKだった。マークは小柄だ、ぴったりの銃だが、装填弾数に不安がある。

「こっちの方がいいぞ」俺はそう言つて、マークにUSPコンパクトの9mmを渡す。

「サンキュー」マークはそう言って、USPを装填し始めた。

「エヴァンズ先生、これを」ジェイムズ先生は国語科のエヴァンズ先生にスパス12と弾を渡している。

「ど、どうも…」普段は明るいエヴァンズ先生も、今日は意気消沈している。

「先生、ショットガンだけでは足りないので拳銃も忘れずに装備してください」カイルが二人に告げる。なにせ、二人の持っているショットガンには7発しか装填できない。サブウェポンは重要だ。カイルは二人にブローニングハイパワー(9mm)と弾を渡した。

「すまないな、リーバー君」エヴァンズ先生が礼を言いながらブローニングを受け取る。

「これからどうするんですか？」カイルが二人の先生に聞く。

「俺達はこちらから取り残された生徒を助けつつ、学校から脱出しようと考えている」

ジェイムズ先生が答える。

「何人かに分けて探索をする。リーバー、君は俺の班だ。安心しろ、三沢や松山も同じ班だ」

「では、私はジャクソン君や他の生徒を連れて行こう」エヴァンズ先生はそう言って、他の生徒を集め始めた。

「よしお前ら、準備はいいか？」先生が俺達に聞いてくる。

「大丈夫っす！」松山が応える。

「問題無しです」カイルも応える

「いつでもどうぞ」俺もそう言い、立ち上がる。

「連絡手段はこの無線機だ」先生が無線機を見せる。箱の中にあつたものだ。

「周波数は141.85。全員分あるから配っておくぞ」先生から無線機を渡される。

「よし、行くぞ！」

「サーイエッサー！」と松山が高らかに応える。

「了解です」カイルも自信ありげに応える。

「了解っ！」俺も気合を入れ、返事をする。
必ず、生き残ってやる…。

第四話「決意」(後書き)

銃がたくさん出てきましたね、ジャズはこういうのが大好きですww
ww作中の時代は大体200?年ぐらいなので、近代の銃も出てきます。
次回はバトルシーンですね、疲れそうですwwww

第五話「他の場所」

第五話「他の者達」

同時刻・エーテルタウン大通り

「撃てっ！撃つんだ！」大通りでは警官隊とゾンビとの戦闘が勃発していた。

ズドンッ！ダンッ！ダンッ！ズダダダッ！

ショットガンや拳銃、マシンガンの発砲音が大通りに響き渡る。

「撃ちまくれっ！なんとしても食い止めろ！」誰かが叫ぶ。響く発砲音、怒声や罵声、悲鳴が

飛び交う中、ゾンビ達は確実に警官隊に迫っていた。

「エリッククッ！撃て！」俺、エリック・ポートマンは隣と同僚にそう言われ、手に持っているレミントンM870ショットガンを撃つ。一体のゾンビが仰け反る、が再び迫ってくる。

「クソ野郎どもがあああ！」隣ではスワット隊員がM4を乱射している。

しかし、M4の5.56mm弾でもゾンビの進行を止めることはできない。

「ぎゃあああ！」警官の一人が噛み付かれる。まずい、形勢が悪すぎる。

「チャーリー、逃げるぞ」俺は隣でM92を撃っている同僚、チャーリー・ギブソンに声を掛ける。

「に、逃げるって：仲間を見捨てるのか！？」チャーリーが戸惑いの声を上げる。

「この状況じゃ全滅も時間の問題だ。一人でも多く逃げて、市民を助けるんだ」

こんな大群を相手にするという計画自体無謀だったのだ：。

「：分かった。皆！逃げろっ！一人でも多く生きて、市民を助けるんだっ！」チャーリーはそう叫ぶと、ゾンビに何発か打ち込み、後

退する。

何人かも、後退を始めている。唯一の救いは、ゾンビの動きが遅いことだ。

「皆、逃げろおお！」誰かが叫び、走り出す。何人もそれに続く。

「俺達も逃げるぞ！」俺はチャリーにそう言い、走る。

エーテルタウンは、地獄と化していた…。

同時刻・エーテルタウン総合病院

「廊下、敵影無し」俺、キース・ローウェルは部下からクリア（敵影無し、安全の意味）の報告を受け、廊下に出る。そこらにはゾンビの死体…いや、奴らはすでに死んだ人間だ。残骸、とでも言うべきか。

俺達是对バイオハザード部隊、通称アヴェンジャー（復讐者）と呼ばれる組織である。

バイオハザードテロで大切なものを失った人物で構成されている。「キース隊長、見てください」ポイントマンの部下が呼びかけてくる。

「これは…リッカーか…？」転がっていた残骸には、何かで貫いた痕があった。

「おそらく…」俺は顎に手を当て、考える。

ここはただの病院だ、ならなぜBOW（動物兵器）が存在する…？

「隊長っ！上に反応です！」

「っ！」全員が持っているM4カスタムを天井に向ける。

ヒタ…ヒタ…ヒタ…

リッカーか…。リッカーはラクーンシティ事件の時に存在が確認されたといわれている

BOWだ。人間がTーウィルスと呼ばれるウィルスに感染し、突然変異した個体がリッカーだ。

視覚がゼロに近い代わりに、恐ろしいほどに良い聴力を持つ。

俺はハンドジェスチャーで、発砲準備を告げる。

部下から了承の意味が返ってくる。俺は天井を見る。恐らく天井に設置されている

排気口から降りてくるだろう。

ガシャーッ！案の定上から降ってきた。

「撃てっ！」短く声を張り上げ、M4の引き金を引く。

ズダダダッ！

「グギャァ！」奴の弱点、むき出しの脳に弾丸が命中する。

奴は動かなくなった。

「よし、速いところ探索して目標を確保するぞ」俺はそう言い、歩き出した…。

学園に限らず、戦いは始まっていた…。

第五話「他の場所」(後書き)

浩一達とは別の人物達による脱出劇が繰り広げられました。今回出てきたキャラは重要な人物達なので覚えておいた方がいいと思いますよ。

第六話「化け物」

B校舎・一階・廊下

「異常は：無いな」ジェイムズ先生がM3を持って周囲を警戒する。
「こっちも異常無しです」ジェイムズ先生の反対側では、カイルがM92を構えている。

「では、俺達はこっちだ。行くぞ」そう言うと、ジェイムズ先生は廊下の右側を進んでいく。

「どこから回りますか？」松山が聞く。

「とりあえずはB校舎だ。A校舎はエヴァンズ先生の班に任せよう」
「了解です」俺は返事を返し、グロックを構える。勿論、引き金に指は掛けない。

暴発して味方を撃つ、なんて最悪だ。他の皆もそうしている。

俺と松山で後方を警戒しながら廊下を渡る。前方はカイルと先生が警戒している。

曲がり角でゾンビが現れる。先生とカイルが発砲する。

M3から12ゲージの弾丸が発射され、M92からは9ミリ弾が発射された。

しかし、ゾンビはのけぞるだけだ。

「まずいぞっ！」松山がUSPを発砲する。45ACP弾がゾンビに命中する。

「くたばりやがれっ！」俺もグロックの引き金を引く。9mm弾が発射される。

運良く、松山の弾がゾンビの頭に当たる。腐っている為か、いとも簡単に頭は吹き飛んだ。

頭部を無くしたゾンビは倒れたきり動かなくなった。

「弱点は頭か？」カイルがマガジンを交換しながら言う。

「映画そっくりだな？」先生がショットシェルを装填しながら言う。

「頼りなのは松山の45口径か？」俺はそう呟く。先が思いやられ

る…、なにせ松山は校内一のお調子者だ。

まさかそんな奴に命を預けることになるうとは…。

「いや、吹き飛ばさなくてもいいかもしれない」カイルが言う。

「人間の筋肉の動きは全て脳でコントロールされている。つまり、脳を使えなくすれば

奴らは完全な死体に戻る」

「なるほど…、それなら9ミリでも大丈夫だな」どうやら松山に頼らなくてもいいらしい。

「ショットガンで動きを止めて、拳銃で止めを刺す。このやり方で行こう」先生がそう提案する。

「了解です」俺達は先生の作戦に納得しつつ、歩を進めた。

警官隊全滅から数十分後…

ベイカー銃砲店

「チャーリー、ほら9ミリ弾」俺は相棒に弾を分ける。ついさっき拾ったものだ。

「ああ、すまない…」チャーリーは同僚が大勢死んだことにショックを受けているらしい。

いや、ただ死んだだけならまだいい。死んだ元同僚達は、ゾンビとして生き返り、同じ警官を

食い始めた。それが数分前の出来事だ。結局、迎撃部隊で生き残ったのは俺達二人だった。

スワット隊なども全滅、大通りは血の海だ。

大通りという地獄から死に物狂いで逃げ込んだのがこの銃砲店だった。

なんでも、違法な銃器があるという噂が広がっていたために捜査対象だった店だが、

今は好都合だ。隠されていたAK47などの銃で武装した俺達は、ありったけの弾をかき集めていた。ショーケースにあった拳銃などはほとんど無くなっていた。恐らく市民が持っていたのであろう。

幸い、弾は何個か箱で余っていた。

「さて、そろそろ行こう」俺はそう相棒に言い、出発の準備を整えた。

ふと、三番街に住んでいる妻のことが心配になった。

この状態だ、生きているかすら怪しい…。ふと、ゾンビによって喰われる妻を想像してしまう。

（まったく、俺は何を考えてるんだ…）頭から不吉な想像を振り払い、ドアに向かう。

（ジェーン…、生きていてくれよ…）そうだ、生きてまた妻の顔を見よう。そう決心し、ドアに手を掛けたその時…

ガシャーッ！反対側の窓ガラスが割れ、何かが現れた…。何かは蛙のような爬虫類だった。

しかし、圧倒的に爬虫類とは違う所があった。爪があった、鋭い爪が。しかも、二足で歩いている…。

「な、なんだ！」チャーリーが慌てて銃を構える。同時に化け物がジャンプする。

化け物は瞬時にチャーリーの前に立ち、彼の首を切り落とした。

首の無くなった胴体から血が噴水のように噴出し、頭は床に落下した。

「う、うわああああ！来るなあああああ！」何が起こったんだ？相棒の首が飛んだ。

首が飛んだ、くびがとんだ、クビガトンダ。奴が同じようにジャンプする。

AKの引き金を引く。弾は当たらない。奴が目の前に立つ。その瞬間、俺の視界は暗くなった。

最後に見えたのは、天井と、自分の首が無い胴体だった…。

彼が妻の顔を見ることは、二度と無かった…。

第六話「化け物」(後書き)

覚えておいた方が言いといいながら早速キャラを
殉職させてしまいましたWWW

次回はアヴェンジャーが中心の話の予定です。

第七話「目標」

病院・二階・薬品室

「隊長、目標αを確認しました」リアセキュリティ（後方警戒員）の部下が目標αと呼ばれる薬品を持ってくる。

「これが：デイライト改か…」部下の手には一つのアタッチケースがあった。

その中に、デイライト改があった。デイライト改は、Tーウィルス用ワクチンである

デイライトに改良を加え、Tーウィルスの強化型であるGーウィルスやTーベロニカに

対抗できるようにとある科学者が作り出したワクチンである。

このワクチンは、投与すればTーウィルスを体内から消滅させるだけでなく、Tーウィルスに

感染しなくなる効果まである。

「よし、全員投与しろ」俺の一言で隊員がデイライト改を投与する。

「これでウィルス感染の恐怖はなくなりましたね」オムニマン（重火器専門員）の部下が言う。

「ああ。だが、まだ目標βが残っている」俺達の任務、それはデイライト改の回収、

もう一つはある人物の救出だ。

「目標βは、情報によると学園にいますね」ポイントマンの部下が言う。

「学園か…」病院からそう遠くは無いな…。

「よしっ。準備ができ次第、学園に急行するぞ」部下にそう言い、俺は医薬品をかき集める。

感染の恐れが無いとはいえ、怪我を放置するのは好ましくない。

薬は持てるだけ持った方がいい。

病院・二階・廊下

「前方、敵影無し」

「後方、敵影無し」

「階段、敵影無し」

部下がそれぞれ報告してくる。

「よし。階段を使用して一階に降りて、それから…」それから学園に向かう、

と言おうとした瞬間、人影が廊下の角から現れた。

「っ！」部下が銃を向ける。その先には、何かうごめいていた。

「リーチマンか…」リーチマンはTーウィルスの影響により、巨大化し、凶暴化した

ヒルが人間に寄生して生まれたBOWだ。

「発砲許可！」俺はそう声を張り上げ、M4の引き金を引いた。

ズダダダダッ！銃声が響く。

「隊長ッ！反対側からも二匹来ますッ！リッカーです！」二匹のリッカーが廊下の反対側から

現れる。

「密集陣形！二手に分かれろ！」俺はそう叫ぶと、ポイントマンの部下の横に着く。

オムニマンの部下は、リアセキュリティと組む。

二チームに別れ、各員が背中合わせになる。俺のチームはリッカー側、もう一つは

リーチマンの方を向く。

「くたばれッ！化け物！」オムニマンがドラムマガジンを装着したM4を発砲する。

「援護しますッ！」リアセキュリティが狙撃仕様のM4を発砲する。俺は向かってくるリッカーの頭部を狙う。部下のマガジンが空になる。

「ローディング！（装填中）」

「了解！」部下に迫っているリッカーに5・56ミリを食らわす。

「装填完了！」部下の声と同時に、俺のM4が弾切れになる。

「テイクカバー！（援護を求む）」

「了解です！」部下が装填中の俺を援護する。リッカーが一匹倒れる。

向こうでは丁度、リーチマンを倒したらしい。二人が援護に来る。

狙撃仕様のM4が放った5・56ミリは、リッカーの貧弱な頭部を貫いた。

断末魔を上げ、リッカーが倒れる。

「時間を食ったな、行くぞ！」俺はそう言い、病院を脱出する。

外には、移動用の装甲偵察車がある。それに乗り、安全圏まで退避する。

そして、仕掛けておいたC4プラスチック爆弾の起爆装置を押した……。

爆音と共に、化け物の巣である病院が崩れ落ちる。

「まだ終わった分けじゃない、油断するな」隊員にそう言い聞かせ、俺はM4の整備を

始めた……。

第七話 [目標] (後書き)

漢字でおかしい表記があったり、銃の表現が変だったらいってくだ
さいね。

第八話「新たな死者」

B校舎・二階・理科室

「ゾンビは…、居ないな」先生が理科室をのぞき、ゾンビが居ないか確認する。

幸い、理科室は荒らされては居なかった。

「何人生きてるんだろうな…」松山が悲観的な声を出す。

「俺達が生きてるんだ、きっと生存者はいるさ」俺はそう松山に言う。

「そうだよな、きっと何人か生きてるはずだ！」松山は急に元気になると、理科室を物色し始めた。

「なんか使えそうなものは…」しかし、所詮は学校の理科室、たいした物は見つからなかった。

「ここには誰も居ないな。よし、次に行こう」カイルはそう言い、警戒しながら廊下に出る。

A校舎・一階・資料室（マーク視点）

「異常なし…」エヴァンズ先生はそう言い、資料室のドアを開ける。

そこには一人の少年が居た。

「君、大丈夫かい？」先生が声を掛ける。

「う…、うう…」よく見ると、噛まれた後がある。

「大丈夫か？いま、治療する」先生は救急スプレーを背囊から取り出し、生徒の傷口に

吹きかける。救急スプレーは傷口に吹きかけることによって、傷を治すという便利な医薬品だ。

「か、痒い…」男子生徒はそう言うと、傷口を掻き始める。

「待て、掻くんじゃない！保健室に行って治療しよう。歩けるか？」

先生が慌てて止める。そして、生徒に肩を貸す。

「マーク、ジェイムズ先生の班に連絡してくれ。生存者一名確保と」「分かりました！」俺はそう言い、通信機を使ってもう一つの班に連絡する。

「こちらマーク、生存者一名……確保！と言おうとした瞬間……」

「うぎゃああああ！」エヴァンズ先生は生徒に噛まれていた。

「う、うわああああ！」他の生徒がパニックを起こす。

「逃げろおおお！」一人が駆け出す。俺は銃をホルスターから引き抜き、先生を喰っている

ゾンビに向けて銃を発砲する。銃弾はゾンビの体に命中する。駄目だ、効果がない！ゾンビは俺の方に向かって歩いてくる。

「く、くそっ！このっ！このお！」二発、三発と食らわせていく。効果なし。

ゾンビが噛み付いてきた。

「がああああ！」痛い！痛い！痛い！さらにゾンビが噛み付いてくる。

「が、ぐぎゃ……」喉笛が噛み千切られた感覚を味わった後、目の前が真っ赤に染まる。

絶えられず、地面に倒れこむ。噛み付かれた時に落とした無線機から、声が発せられている。

>>マーク、応答しろ！マークッ！<<仲間の叫ぶ声を聞きながら、マークは深い死の淵へと落ちていった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4967h/>

バイオハザード エターナルナイトメア

2010年10月17日16時06分発行